

# 中海は宝物

未来守りネットワーク活動記

<6>

アマモの種子採取から4カ月を経て2005年11月12日、会員、子ども、漁業関係者、市民ら約100人という多くの参加者により、第1回のアマモ移植イベントを開催できました。種子の設置法(図を参照)は、播種(はしゅ)シート1枚に、種子250〜300粒を混ぜたのりを塗る方法で植え付けた後、ダイバーの手によって水深1〜2坪の海底に固定します。これを20枚(約100平方メートル)設置しました。

移植から5カ月余りの翌年5月2日、アマモの生育

## 初のアマモ移植

調査の日を迎えました。目視ではかすかにアマモらしき葉は見えるのですが、確信が持てません。当時の私の心境は、子どもが生まれる時の父親のようでした。2人のダイバーが海中に消え、2〜3分後には両手で大きく「まる」を示したのです。

喜ひと安堵(あんど)の

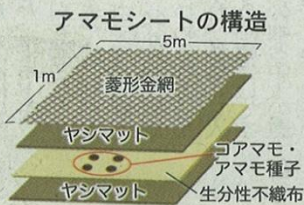
## サイン「まる」に大喜び

気持ちを抑えきれず、関係者はもちろん、何も知らずに近くで魚釣りをしていた

人とも握手をしたことを思っ率でした。葉は40〜60センチ、稲穂が垂れるように勢いよくアマモの森を形成し



第1回アマモ移植イベントで、種を混ぜたのりをシートに塗る子どもたち=2005年11月12日、境港市内



ていました。

同じ年の6月7日、夢みなどタワリーの会議室において、第1回のアマモ移植報告会および勉強会を開催しました。80人以上の会員、行政機関、市民、漁業者の方々に参加していただき、鳥取大学工学部の松原雄平教授に「中海再生について」をテーマに講演していただきました。

その中で松原教授は、過去に中海でアマモ場再生を試みたことに触れられまし・奥森隆夫)

た。当時の中海は潮通しが悪く水質も安定せず、水質の悪い海に生息するホトトギスガイに覆われ、アマモは死滅したようです。特に中海の南側は貧酸素の影響を受けやすい環境なので、堤防開削や中浦水門の撤去後に波、潮通し、水質などを調査して、再生事業に取り組みことが重要だと力説されました。また、未来守りネットワークの活動に対し全面的に協力にいた